



小田原市立芦子小学校学校だより

あしこだより

令和7年度 11月号
発行者:石井 美佐子



進んで考え学ぼうとする子・仲間と関わる子・たくましくチャレンジする子

10月27日のスポーツフェスティバルには、平日開催となったにもかかわらず、たくさんの保護者の方や地域の方にご来校いただき、たくさんの声援をお送りくださり誠にありがとうございました。また、近隣にお住いの皆様には、放送の音など、ご迷惑をおかけすることもあったかと思いますが、温かい目で見守っていただき、感謝しております。本当にありがとうございました。

今回のスポーツフェスティバルは数年ぶりに勝敗をつけました。これまでもお伝えしてきましたが、勝敗をつけるにあたって、私達職員は、子ども達みんなが気持ちよく、そして笑顔で参加できること、目標に向かって互いに励まし合い、自分ができることを精いっぱいやってみることができるようになること、などについて話し合いながら進めてきました。負けて悔しい思いをした子どもいると思います。その思いを大切にしつつ、負けたことを誰かのせいにすることなく、次へのステップにできるように、事後の指導にも心がけてきたつもりです。閉会式の後の子ども達の顔を見ると、案外あっさりしていたようにも思いますが、ご家庭ではいかがだったでしょうか。

先日、北京オリンピック男子4×100mリレー銀メダリストの末續 慎吾氏の話聞く機会がありました。その中で「負けることも、人が成長する上で大切なこと。負けるという経験をしないと“自尊心”が肥大化していく」というお話がありました。負けること、失敗することを通して人は成長します。大切なのはどう負けるのか、どう失敗するのか、そして、それらの経験をその子にとっての学びに、成長のステップに変えていくことだと思います。それには大人の適切なかわりも必要だろうと思っています。



昇降口の
応援あしこん

関わる力 児童の主体性をいかながら温かな人間関係をつくる取組⇒特別活動の充実



「地域とともにある学校づくり」をめざして

11月12日(水)に今年度2回目の学校運営協議会を開催しました。授業の様子をご覧いただいた後、教科等の学習の中での、地域(芦子地区・小田原市)の「ひと・もの・こと」との関わりについて、これまでの各学年の取組をお示しし、地域の皆様の思いを伺いました。

「コロナ禍前と比べて、児童と地域の関わりは減っていると思う。もう少し増やしてもいいのではないか。」「まずは地域を歩いてみてほしい。」「地域の行事に子ども達の参加が少なくなっている。休みの日は忙しい子も増えているよう。」「4年生が社会科で防災の学習をしたとのことだが、学習の成果を『いっせい防災訓練』で掲示してもよいのではないか。」などのご意見がありました。

現行の学習指導要領では、学習内容が増え、なかなか外に出る時間を確保することが難しい状況ですが、学校としては、持続可能な形で、地域と関わる学習の充実を図っていきたいと考えています。地域の皆様には、新しい形になるものもあるかもしれませんが、今後ともご理解とご協力をいただければ幸いです。



ご紹介が遅くなり恐縮ですが、今年度の学校運営協議会委員の皆様です。どうぞよろしくお願いいたします。

そのような中、11月15日（土）にPTA主催のフェスタがありました。今年度も地域の皆様にご参加くださいました。まちづくり委員会の皆さんは、学区の安全地図を改訂するために、子ども達に聞き取り調査されていました。子ども達自身が「危ない」と感じる場所がたくさんあったようです。当事者（児童です）の声が集まることで、より具体的な安全地図になるだろうと思います。こうして地域の方が、自分たちの安全を守るために活動してくれていることを、子ども達に伝えたいと思います。

また、折り紙のコマや割りばし鉄砲の作り方を教えてくださいました。地域の方から教わる体験も減っていると思うので、とてもよい機会だと思います。今年は池上自治会の皆様も発泡スチロールを使ったボートづくりコーナーを出店くださいました。自治会の方にお話を伺ってみたところ、「自治会に加入してもらおう」ことが目的ではなく、フェスタへの出店が自治会の活性化につながればいいという思いから今回企画した、と仰っていました。学校には「地域活性化の拠点」としての役割もあるのだと改めて思いました。PTAの皆様、ボランティアの皆様ありがとうございました。



読書週間に寄せて

11月10日（月）～15日（土）の読書週間で、今年は私も3年生と6年生の教室におじゃまして、読み聞かせをしました。

3年生では「3びきのかわいいオオカミ」という絵本を読みました。多くの人が読んだことがあるであろう「3びきのこぶた」を素敵にひねったお話です。「3びきのこぶた」では、小さな子ぶたをいじめるのは悪いオオカミですが、この絵本ではその立場が逆転します。昔話では、オオカミはだいたい悪者で、最後は退治されるのがもっぱらですが、このお話では、ブタがなかなか豪快な悪者に描かれています。（その悪者ぶりに子ども達は驚くやらあきれるやら・・・、わーわー言いながら聞いてくれました。）作られてきたイメージを逆転させ、ブタでもオオカミでも悪い人もいれば、いい人もいる、ということに気づいてもらえたらいいなと思いながら読みました。そして結末も「勧善懲悪」になっていないのも、キャラクターの設定を含めて極めて現代的です。絵本から学ぶことが多いなと思います。この本に入っていた「絵本のしおり」の中に、訳者のこだまともこさんのコメントがありましたので、その一部を紹介します。



E.トリザピス・文
H.オクセンバリー・絵
こだまともこ・訳(富山房)

わたしは、絵本というものは教訓を垂れたり、なにかを教えたりなどしなくてもけっこう、楽しければ満足で満点と思っている。それでも子どもたちがいろんな絵本を読んで、「世の中にはこういう人もいるんだな、こういうことを思う人もいるんだな」と感じてくれたら、すばらしいと思う。「3びきのかわいいオオカミ」の作者トリザピスさんもきっとこのお話を、けらけら笑いながら面白がって書いたのだと思うが、この絵本を読んだ子どもが「ああ、こういうオオカミもいるんだな。こんなブタもいるんだな」と思ってくれたら、作者冥利につきるだろう。でもそれ以上にあの動物園のオオカミをはじめ世界中の気の弱いオオカミたちが大喜びするのではないかしら。

心に残る本との出会いは一生の財産です。たくさんの素晴らしい出会いがあるように、学校では取組を進めていきたいと思っています。

関わる力「ことば」とおして人と関わる力を育む取組⇒読書活動の充実

